

今号の特集テーマは「首下がり症候群の病態と治療」である。首下がりとはわれわれも注目しており、遠藤先生の論文にもあるように、「発症報告は平均寿命の伸延が著しい先進国に多く、今後の高齢化と疾病認知の拡大により、さらに増加する可能性がある」というまさにそのとおりと思われる。われわれも近年非常に多くの症例を経験しており、今日まさに common disease の仲間入りをしそうな疾患の1つとさえいえよう。その割にその本態がほとんど理解されていないという、注目される病態である。

首下がりの初期の報告として、神経内科の日本の先駆者である三浦謹之助の報告があることは有名である（三浦謹之助：首下り病研究報告。中外醫事新報 350：1225-1229, 1894）。これは、東北地方の北部での風土病としての存在を指摘したもので、この流行地域の俗称を用いた「首下がり」病という病名が、今日まで日本で使われているものである。しかし、それ以外にも1817年のParkinsonによるshaking palsy（Parkinson病）の原著報告にも記載されていること、1886年にGowersが重症筋無力症例で報告していることを、私不勉強でそれぞれ、藤本先生・遠藤先生、白土先生の論文で今回初めて知った。古くて新しい疾患であることがこれらからもわかる。

首下がりの混沌さは、報告する人によって原因疾患の比率が大きく異なることから推測される。われわれの検討では重症筋無力症ないしその疑いが圧倒的に多いが（小川 剛，園生雅弘：重症筋無力症に伴う首下がり症候群。神経内科 81：75-80, 2014），これもまた特異な報告であろう。診断根拠において問題が残ることは筆者らも感じている。原因としては、大きくParkinson病などの中枢神経変性疾患と、筋萎縮性側索硬化症、炎症性筋疾患、重症筋無力症などの神経筋疾患に大別されるが、本特集でも執筆している黒川先生らの報告のように、Parkinson病で首下がり呈する症例でも後頸筋で明確なミオパチー性変化が認められることが多いなど、両者の境界さえ曖昧である。

本特集ではそれぞれのexpertがそれぞれの立場からこの首下がりという病態について論じている。この不思議な症候群の理解と診療の進歩に本特集が大いに役立つことが期待される。

（園生雅弘）

論文外部審査委員

朝妻孝仁 嶋村 正 高橋和久 高橋啓介 松永俊二
持田譲治 山下敏彦 久保和親 庄田 基 水野順一

脊椎脊髄ジャーナル

編集顧問

長島親男 小野啓郎 萬年 徹
高橋 昭 金田清志 小山素磨
小柳知彦 田代邦雄 国分正一
服部孝道

編集委員

戸山芳昭（編集委員長）
青木茂樹 安藤哲朗 金 彪
園生雅弘 高安正和 田口敏彦
谷 論 徳橋泰明 花北順哉
飛驒一利 松山幸弘 山崎正志
米延策雄

Vol. 28 No. 11
(2015年11月25日発行)

毎月1回25日発行

1部定価（本体2,300円＋税）

（配送料別）

年ごめ予約購読料 30,700円＋税

送料弊社負担

発行／株式会社 三輪書店
代表者 青山 智

〒113-0033

東京都文京区本郷6-17-9

本郷網ビル

TEL 03-3816-7796

FAX 03-3816-7756

URL <http://www.miwapubl.com/>

（担当：山岸）

印刷所／三報社印刷株式会社

TEL 03-3637-0005

広告申込所／

（株）文栄社

TEL 03-3814-8541

（株）ハイブリッジエージェンシー

TEL 03-3814-0089

本誌の内容の無断複写・複製・転載は著作権・出版権の侵害となることがありますのでご注意ください。

Published by MIWA-SHOTEN Ltd.

6-17-9 Hongo, Bunkyo-ku, TOKYO © 2015,

Printed in Japan

〔JCOPY〕〈出版者著作権管理機構 委託出版物〉

本誌の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。複製される場合は、そのつど事前に、出版者著作権管理機構（電話 03-3513-6969, FAX 03-3513-6979, e-mail: info@jcopy.or.jp）の許諾を得てください。